

特集

看護の未来を創造する アクションリサーチ

人々とともに、人々のために

看護学の向かう先は、どこにあるのでしょうか？

看護学の研究における成果は、何をめざしているのでしょうか？

多くの看護理論家が共通して述べている看護学、看護実践の目的は、人間の健康・安寧です。本特集で取り上げるアクションリサーチのめざす成果は、まさにこれと同じです。アクションリサーチは、変革や改善が求められるフィールドにおいて、研究者がそのために必要なアクションをフィールドの人々とともに起こすという、ダイナミックで魅力的な研究方法であり、現在、大きな関心が集められています。ただ、そうした関心と魅力がある一方、いたずらにアクションリサーチに取り組み、起こしたアクションが不適切である場合、危険な研究方法にもなり得ます。その意味でも、アクションリサーチという研究方法を十分に理解しておく必要があります。そこで本特集では、アクションリサーチの概要から実際の方法、研究動向、意義や課題などについて取り上げてその全体像を浮き彫りにし、アクションリサーチの広く深い理解をめざすこととしました。

特集で執筆いただく江本リナ氏、草柳浩子氏、伊藤久美氏、山内朋子氏は、筆者の研究である文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)「小児看護におけるケアリングと癒しの環境創造——アクションリサーチを用いて」(2007-2011年度)の共同研究者の方々です。この研究には、J. Watson氏にも参加いただいたので、主にケアリングにおけるアクションリサーチについて執筆いただきました。さらに看護学からは遠藤恵美子氏より、看護学領域でアクションリサーチに長く取り組まれてきたそのご経験と知見を紹介いただきます。

加えて他領域からも、心理学者のやまだようこ氏と社会学者の袖井孝子氏に執筆をお願いしました。筆者は両氏にご縁があり、やまだ氏は、日本学術振興会基盤研究A(海外)「多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発」(2008-2012年度)に筆者も参加させていただき、袖井氏は、『高齢社会のアクションリサーチ』(東京大学出版会、2015)の中で、看護学教育におけるアクションリサーチの現状について、筆者が袖井氏のインタビューをお受けしました。ともにその学問領域で一線に立ってこられたお立場から、貴重な論考を寄せていただいています。

こうした多様な角度から、アクションリサーチを探求します。アクションリサーチがさらに浸透し、人々の健康と安寧の実現に寄与することを願っています。

企画：筒井真優美(日本赤十字看護大学名誉教授・同大学国際交流センター長)